平成14(2002)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

内海中所在遺跡1
岩吉遺跡
桂見古墳群

2003

鳥取市教育委員会

平成十四(二〇〇二)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書　二〇〇三　鳥取市教育委員会

序　　文

鳥取市は海・山・大砂丘など豊かな自然環境に恵まれた山陰東部の中核都市として発展してまいりました。現在市内には数多くの遺跡が知られておりますが、全国的な近年の各種開発事業の増加とともにその取り扱いが重要課題となっております。もともと埋蔵文化財は、先人の生活を知る上で欠くべからざるものと言われてまいりましたが、特に環日本海交流が叫ばれる今日、先人たちの知恵・交流を窺い知ることは、これからの生活・交流等にかならずや役立つ市民の貴重な財産となりましょう。このような認識のもと鳥取市教育委員会では開発と文化財の共存を図るべく各関係機関の指導を得るとともに市民の皆様の深いご理解をいただきながら埋蔵文化財調査事業を進めております。

さてここに報告いたします内海中所在遺跡１、岩吉遺跡、桂見古墳群の発掘調査事業も地権者の方々をはじめとする関係各位のご協力によって無事所期の目的を果たし、大きな成果を得て報告書刊行のはこびとなりました。

ささやかな冊子ではありますが、市民の皆様ならびに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

平成15年３月

鳥取市教育委員会
教育長　中川俊隆

例　　言

1．本書は、平成14年度に国・県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財調査の記録です。

2．調査を実施した遺跡は内海中所在遺跡１、岩吉遺跡、柱見古墳群です。

3．本書に用いた方位は第１図、第２図、第10図、第11図を除き磁北を示します。また、レベル(H)は基本的に海抜標高です。

4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されています。

5．現地調査から本書の作成にあたっては、多くの方々から指導・助言ならびにご協力をいただきました。厚く感謝いたします。

6．発掘調査の体制は以下のとおりです。

発掘調査主体　鳥取市教育委員会

事　務　局　鳥取市教育委員会文化課

調 査 担 当　前田　均・山田真宏・谷口恭子・藤木隆之・平川　誠

本 文 目 次

序　　文
例　　言
目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1．発掘調査の契機と調査の目的 …… 1
　2．発掘調査の経過 …… 1
Ⅱ　内海中所在遺跡1 …… 3
　1．遺跡の位置と環境 …… 3
　2．発掘調査の概要 …… 3
Ⅲ　岩吉遺跡 …… 13
　1．遺跡の位置と環境 …… 13
　2．発掘調査の概要 …… 13
Ⅳ　桂見古墳群 …… 14
　1．遺跡の位置と環境 …… 14
　2．発掘調査の概要 …… 14
Ⅴ　おわりに …… 16
　1）内海中所在遺跡1 …… 16
　2）岩吉遺跡 …… 16
　3）桂見古墳群 …… 16

写真図版
発掘調査トレンチ一覧表
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　調査地周辺遺跡分布図……2
第２図　内海中所在遺跡１　トレンチ配置図……3
第３図　内海中所在遺跡１　第１、第２、第３、第４トレンチ実測図　……5
第４図　内海中所在遺跡１　第５、第６、第７、第８トレンチ実測図……7
第５図　内海中所在遺跡１　第５トレンチ拡張部実測図……8
第６図　内海中所在遺跡１　第９、第10、第11、第12、第13トレンチ実測図……9
第７図　内海中所在遺跡１　第14、第15、第16トレンチ実測図……11
第８図　内海中所在遺跡１　表採縄文土器実測図(拓影)……12
第９図　岩吉遺跡　第１トレンチ実測図……13
第10図　岩吉遺跡　トレンチ位置図……13
第11図　桂見古墳群　トレンチ配置図……14
第12図　桂見古墳群　第１、第２、第３、第４、第５トレンチ実測図……15

図 版 目 次

図版１
１．内海中所在遺跡1 調査地遠景(1)(西北西から)
２．内海中所在遺跡1 調査地遠景(2)(南南西から)
３．内海中所在遺跡1 第1トレンチ(東南東から)
図版２
１．内海中所在遺跡1 第1トレンチ出土遺物
２．内海中所在遺跡1 第2トレンチ(北北東から)
３．内海中所在遺跡1 第2トレンチ出土遺物
図版３
１．内海中所在遺跡1 第3トレンチ(東から)
２．内海中所在遺跡1 第3トレンチ出土遺物
３．内海中所在遺跡1 第4トレンチ南壁断面(北から)
図版４
１．内海中所在遺跡1 第4トレンチ出土遺物
２．内海中所在遺跡1 第5トレンチ(東から)
３．内海中所在遺跡1 第5トレンチ拡張部(東南東から)
図版５
１．内海中所在遺跡1 第5トレンチ拡張部 SD-01,02(南西から)
２．内海中所在遺跡1 第5トレンチ拡張部 SD-03(東北東から)
３．内海中所在遺跡1 第5トレンチ拡張部 ピット列およびSD-04(東北東から)
図版６
１．内海中所在遺跡1 第5トレンチ出土遺物
２．内海中所在遺跡1 第5トレンチ拡張部出土遺物
３．内海中所在遺跡1 第5トレンチ拡張部 SD-01,02出土遺物(1)
４．内海中所在遺跡1 第5トレンチ拡張部 SD-01,02出土遺物(2)
図版７
１．内海中所在遺跡1 第6トレンチ(東南東から)
２．内海中所在遺跡1 第6トレンチ遺物出土状況(西北西から)
３．内海中所在遺跡1 第6トレンチ出土遺物
４．内海中所在遺跡1 第7トレンチ(東南東から)
図版８
１．内海中所在遺跡1 第7トレンチ周辺表採遺物
２．内海中所在遺跡1 第8トレンチ西壁断面(東南東から)
３．内海中所在遺跡1 第9トレンチ北壁断面(南南西から)
図版９
１．内海中所在遺跡1 第10トレンチ(東南東から)
２．内海中所在遺跡1 第11トレンチ(南南西から)
３．内海中所在遺跡1 第12トレンチ西壁断面(東南東から)
図版10
１．内海中所在遺跡1 第12トレンチ出土遺物
２．内海中所在遺跡1 第13トレンチ(南西から)
３．内海中所在遺跡1 第13トレンチ出土遺物
図版11
１．内海中所在遺跡1 第14トレンチ(南西から)
２．内海中所在遺跡1 第14トレンチ出土遺物
３．内海中所在遺跡1 第15トレンチ(南から)
図版12
１．内海中所在遺跡1 第15トレンチ出土遺物
２．内海中所在遺跡1 第16トレンチ(南西から)
３．内海中所在遺跡1 第16トレンチ出土遺物
図版13
１．内海中所在遺跡1 表採縄文土器
２．岩吉遺跡 調査地近景(西から)
３．岩吉遺跡 第1トレンチ(南から)
図版14
１．桂見古墳群 第1トレンチ(北西から)
２．桂見古墳群 第2トレンチ(北西から)
３．桂見古墳群 第3トレンチ縦断面(西から)
図版15
１．桂見古墳群 第4トレンチ(北西から)
２．桂見古墳群 第5トレンチ縦断面(東から)

Ⅰ はじめに

鳥取市は、鳥取県東部に位置する山陰の中核都市の一つで、行政区域面積は237.20㎢、人口は平成14年12月末現在で15万1,000人強を数え、鳥取県の県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担っている。また現在は近隣の８町村との間で合併協議がなされており、人口20万人を超える特例市としてさらなる発展を目指している。

市の北側には広大な鳥取大砂丘と朝鮮半島・中国大陸へつながる日本海が広がり、中央部には中国山地から流れ出た千代川が南から北へと貫流している。市域の中心はこの千代川の沖積作用によって形成された鳥取平野が占めており、北側を除いたこの平野の周縁部は丘陵地となっている。近年まで平野部は主に水田や近郊農業等の耕作地として利用されるとともに、丘陵地は梨を中心とする果樹栽培地として本市内外へ農産物を供給してきた。しかしながら昨今では企業進出や農業の後継者不足等によってしだいに産業構造が変容するとともに土地利用も大きく変容している。

このような鳥取平野は、原始・古代から周辺地域の重要な生産基盤として人々の生活を支えるとともに交通の要所としても重要な位置を占め、政治・経済・文化の中心として現在に至っている。こうして今日恵まれた各種の条件を背景として鳥取市内には数多くの遺跡が残されてきている。遺跡の種類は各時代・各種にわたり、これまでの遺跡分布調査によって2,300ヶ所余りの埋蔵文化財包蔵地が確認されるとともに現在もその増加の一途をたどっている。このため各種開発事業等との調整が必要となる遺跡も近年急激に増加してきている。

１．発掘調査の契機と調査の目的

今回報告する内海中所在遺跡１、岩吉遺跡、桂見古墳群もそれぞれ場整備、携帯電話基地局鉄塔施設整備、公共施設整備の開発事業として計画され、事前に協議を受けたものである。これらの遺跡のうち、後二者は数次の調査が実施されてきているが、前者はこれまで調査が実施されておらず、開発との円滑な調整に必要な具体的な資料に乏しく、今回それぞれの遺跡の範囲、遺構・遺物の有無と埋蔵状況、遺跡の性格等の資料を得ることを目的として発掘調査を実施した。

２．発掘調査の経過

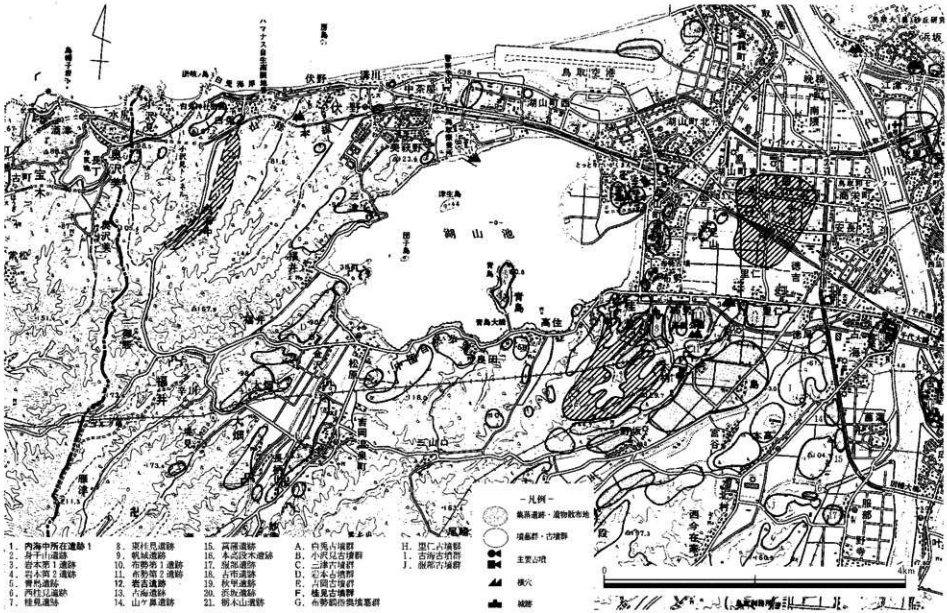
発掘調査は、各調査区ともトレンチ掘削による遺構および遺物の包含状況の確認に主眼をおいて内海中所在遺跡１から着手し、一部はトレンチを拡張して遺構の有無を確認したほか、対象区の南側については秋の収穫を待ってから実施した。また岩吉遺跡は内海中所在遺跡１の調査の合間を縫って、桂見古墳群は秋になってから調査を実施した。

内海中所在遺跡１は、平成14年４月８日から同月15日に丘陵裾の微高地や平野部の畑作地・水田に計11ヶ所のトレンチを設定して調査を行い、５月27日から同月30日に遺構存在を明確にするためにそのうちの一部を拡張した。また11月12日から同月15日までさらに丘陵裾部の水田を中心に５ヶ所のトレンチを設定して調査を行った。調査面積は16トレンチで計278.92㎡である。

岩吉遺跡は、内海中所在遺跡１の調査中の４月22日から24日まで、平野部水田の休耕田に１ヶ所のトレンチを設定して調査を行った。調査面積は12.0㎡である。

桂見古墳群は、10月２日、３日に丘陵部の傾斜の変換点等に計５本のトレンチを設定して調査を行った。調査面積は計24.06㎡である。

以上３遺跡の調査面積の総合計は314.98㎡となる。なおトレンチは基本的にオープン掘削のため、安全性を考慮して段掘りにするなどの配慮をしたほか、必要に応じて埋め戻しを行った。このため断面図は同一方向の壁面を合成したものもある。なお整理作業については現地調査終了時に可能な限り行い、その後報告書作成と共に調査終了後まで実施した。


湖山池
湖山川
湖山駅
湖山町北
湖山町南
湖山町西
湖山町
鳥取駅
鳥取市
鳥取大学
鳥取砂丘研究
浜坂
吉方
安長町
安長
安長町
高住
青島
青島大橋
湖山
湖山
湖山

Ⅱ　内海中所在遺跡１

１．遺跡の位置と環境

内海中所在遺跡１は、西側・東側とも南北に伸びる丘陵に挟まれた幅150～300m程度の奥深い谷平野で、「白兎伝説」で知られる白兎海岸の南約１～２km付近、内海中村集落の南北に所在する。これまでこの周辺では海岸から300m程度の谷口部で砂丘下から多量の五輪塔や土器類が出土した「身干山遺跡」がよく知られていたが、その他の遺跡はあまり知られていなかった。南北に伸びる細長い平野部からは西側・東側の丘陵裾部にさらに小さな谷部がいくつも入り込んでいるが、平成８年12月の県の詳細遺跡分布調査でその内の１ヶ所の出口部付近から須恵器片が認められた。その後、県の遺跡分布地図に「白兎須恵器出土地(仮)」として初めて登録されたものである。

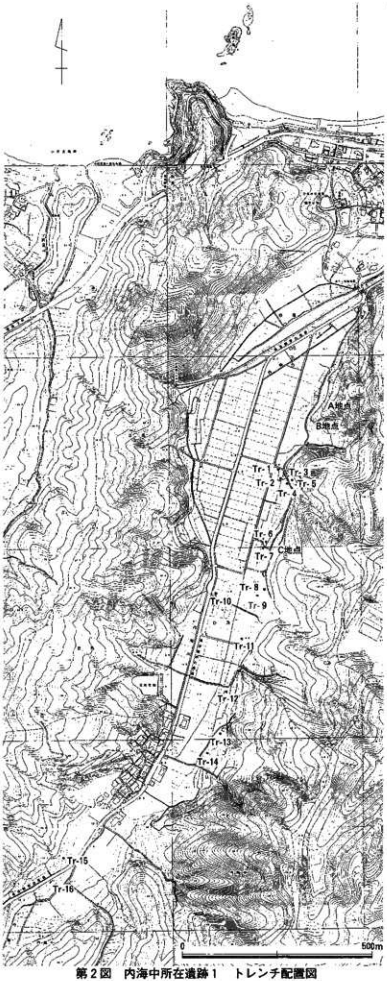
２．発掘調査の概要

今回の発掘調査は、ほ場整備計画に伴い実施したものである。調査は事前の分布調査結果等をもとに、標高４～12mあまりの丘陵裾部やその前面の平野部で実施することとし、平野部に８ヶ所(第１、２、６～11トレンチ)、丘陵裾の微高地上に６ヶ所(第３～５、14～16トレンチ)、丘陵裾の小谷口付近に２ヶ所(第12、13トレンチ)の計16トレンチを設定した。

調査の結果、井戸状遺構、溝、ピットが確認されたほか、自然堆積と考えられるものの多くのトレンチから遺物が検出されるとともに、周辺の丘陵裾付近から縄文土器を含む土器片が採取された。

第１トレンチ[Tr－1]　[第３図；図版1･2]

標高3.6m弱の平野部に設定した４×３mのトレンチである。調査地は水田耕作が行われており、調査時には耕作土が除去されていたが、それ以下は



第２図　内海中所在遺跡１　トレンチ配置図

褐灰色(第1層)、黄灰色(砂混；第2層)、黒褐色(砂混；第3・4層)、オリーブ黒色(砂混；第5層)の粘土層が続き、さらに標高3m前後から下に腐植物を多く含む黒褐色粘土層(第6層)が堆積する。いずれも丘陵裾から谷部への変換付近の自然堆積層と考えられ、二次堆積遺物とみられる弥生土器底部片、上師器口縁部片、須恵器杯身片等が僅かに出土している。遺構は検出されなかった。

第2トレンチ（Tr－2）［第3図；図版2］

第1トレンチの南南東約20m、標高4m強の平野部に設定した4×4mのトレンチである。調査地は第1トレンチより一段高い水田耕作地として利用されている。調査時には耕作土が除去されていたが、それ以下は灰色(砂混；第1層)、黄灰色(第2層)、オリーブ黒色(第3層)、灰色(砂混；第4層)の粘土層が続き、さらに標高3.6m程度から下に腐植物や自然木片を多く含む黄灰色粘土層(第5層)および褐灰色細砂層(第6層)が堆積する。いずれも丘陵裾から谷部への変換付近の自然堆積層と考えられるが、二次堆積遺物とみられる土師器口縁部片、須恵器杯身片、土鍋片等が僅かに出土したほか、第5層からは用下駄片が出土している。遺構は検出されなかった。

第3トレンチ（Tr－3）［第3図；図版3］

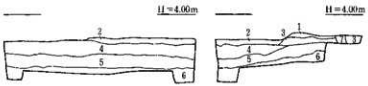
第1トレンチの南東約20m、標高5.2m強の丘陵裾の微高地に設定した3×4mのトレンチである。調査地は第2トレンチよりさらに一段高い水田耕作地として利用されている。耕作土(第1・2層)下は灰色粘質土層(第3～5層)、オリーブ黒色(第6～8層)および灰色(第9層)の粘土層、緑灰色シルト層(第10層)へと続き、さらに緑灰色多礫層(第11層)、地山の岩盤となる。第3～9層は丘陵裾から谷部への変換付近の自然堆積層と考えられるが、このうちの第5、7～9層が二次堆積とみられる遺物包含層である。弥生土器口縁部・底部片、土師器壺口縁部片、須恵器蓋・杯身片および黒漆に赤漆で文様を描いた漆器片、扇の骨部とみられる木器等が出土している。遺構は検出されなかった。

第4トレンチ（Tr－4）［第3図；図版3・4］

第3トレンチの南南東約20m、標高5.2m強の丘陵裾の微高地に設定した4×4mのトレンチである。調査地は水田耕作地として利用されている。耕作上下に自然堆積層が続き、地表面下約0.5～1.6m(標高4.7～3.6m)の暗灰黄色粘質土層(礫混；第9層)、暗黄灰色(第10層)・暗灰色(第11層)・灰色(第12層)の粘土層および、青灰色(第14・15層)・灰黄褐色(やや泥炭混；第16層)の粘土層が二次堆積とみられる遺物包含層である。縄文土器鉢口縁部・底部片、弥生土器高杯・底部片、土師器高杯・壺・甕口縁部・糸切り底部片、須恵器片、算盤玉状土錘等が出土している。第12層が遺構埋土の可能性が僅かにあるが、その他には遺構は検出されなかった。

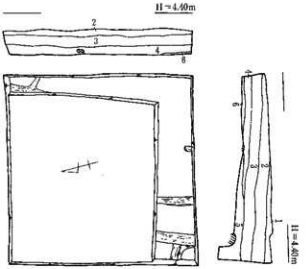
第5トレンチ（Tr－5）［第4・5図；図版4～6］

第4トレンチの北東約15m、標高6.9mの丘陵裾の微高地に設定した5×4mのトレンチである。調査地は畑作地として利用されている。地表面下30cm程度までは客土とみられる撹乱土が認められるが、標高6.6mの第10層(灰色粘質土)以下は比較的整った堆積層と考えられる。地表面下約0.4m(標高6.5m)の黄褐色粘質土層(第11層)および地表面下約0.7～2.1m(標高6.2～4.8m)の第30(黄褐色粘質土)層、第16(黄灰色粘土)層、第32(暗オリーブ褐色粘質土)層、第33(黒色粘質土)層、第36(オリーブ灰色粘土)層、第40(暗オリーブ粘質土)層、第41(暗緑灰色粘砂質土)層、第42(オリーブ灰色粘砂質土)層が遺物包含層で、地表面下約1.7mの第40層上面(標高5.2m前後)の断面からピットとみられる落ちこみを認めた。その後この落ちこみ周辺についてさらに確認するために本トレンチを拡張して調査を行った。その結果、井戸状遺構(SE)1基、溝状遺構(SD)4条、掘立柱列を含むピット（P）30余りを検出した。遺物は、第11層から須恵器片が出土したほか、下位の包含層からは弥生土器口縁部片、土師器甕口縁部片・糸切り底部片・高杯片、須恵器蓋杯片、土鍋片、土錘、刀子等が出土している。遺構内遺物としては、井戸状遺構から弥生土器底部片、土師器片、須恵器片、瓦質上器片、石斧・不明石製品、曲物の底板（？）等が、溝からは、ほぼ重なるSD－01、02から弥生土器底部片、土師器壺片・高杯、須恵器蓋杯・



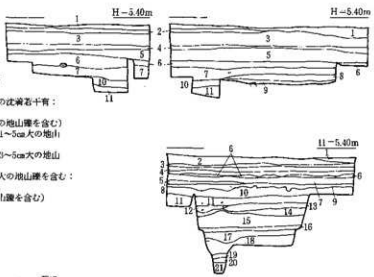
Tr-1

1. 褐灰色粘土（鉄分含む）
2. 黄灰色砂混粘土（鉄分含む）
3. 黒褐色砂混粘土（僅に鉄分及び灰色砂混粘土を多く含む）
4. 黒褐色砂混粘土（極僅かの鉄分及び灰色砂混粘土を含む）
5. オリーブ黒色砂混粘土（僅かに腐植物含む）
6. 黒褐色粘土（腐植物を多く含む）
7. 黄灰色砂混粘土（暗緑）



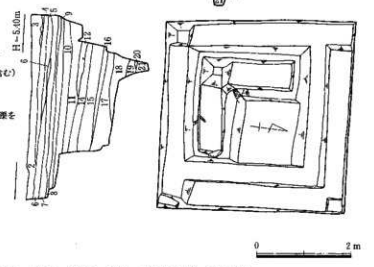
Tr-2

1. 灰色砂混粘土（青色を帯びる）
2. 黄灰色粘土（0.5cm以下の砂粒を僅かに含む）
3. オリーブ黒色粘土（極僅かに1cm程度の小石含む：僅かに腐植物含む）
4. 灰色砂混粘土（青色帯びる）
5. 黄灰色粘土（腐植物及び炭化木片を多く含む）
6. 褐灰色細砂（腐植物及び炭化木片を多く含む）



Tr-3

1. 明黄褐色粘質土
2. 黄灰色粘質土（0.1～0.5cm大の砂礫を含む：鉄分・マンガンの沈着有：シルト質）
3. 灰色粘質土（0.1～1cm大の砂礫を含む：鉄分・マンガンの沈着若干有：炭片を若干含む：シルト質）
4. 灰色粘質土（3.5より褐色かある：0.1～3cm大の砂礫を含む：鉄分・マンガンの沈着有：シルト質）
5. 灰色粘質土（0.1～0.5cm大の砂礫を含む：鉄分・マンガンの沈着若干有：炭片を含む：土器・須器片を含む）
6. オリーブ黒色粘土（0.1～0.5cm大の砂礫を含む：3～5cm大の地山礫を含む）
7. オリーブ黒色粘土（6よりやや明：0.1cm大の砂粒を含む：1～5cm大の地山礫を含む：炭片を含む：木片・土器片を含む）
8. オリーブ黒色粘土（7よりやや明：0.1cm大の砂粒を含む：3～5cm大の地山礫を含む：炭片を含む：木片・土器片を含む）
9. 灰色粘土（8より明：0.1～0.3cm大の砂粒を多く含む：5cm大の地山礫を含む：炭片を含む：土器片を含む）
10. 緑灰色シルト（0.1～0.3cm大の砂礫を含む：3～5cm大の地山礫を含む）
11. 緑灰色多礫層（10より暗）



Tr-4

1. にぶい黄褐色粘質土（暗灰色粘土ブロックを含む）
2. 黄灰色粘質土
3. 黄褐色粘質土
4. 暗灰黄色粘質土（やや砂質かある：0.1～0.5cm大の砂礫を多く含む）
5. 褐灰黄色粘質土（4よりやや暗：0.5～1cm大の砂礫を密に含む）
6. 灰色軟質土
7. 黄灰色粘質土
8. 暗灰黄色粘質土（4より暗）
9. 褐灰黄色粘質土（4より暗く、8よりやや明：0.3～7cm大の礫を密に含む）
10. 明黄灰色粘土
11. 明灰色粘土（ややオリーブ色かある：灰白色粘土を含む）
12. 灰色粘土（やや褐灰色かある：炭片を含む）
13. 灰色粘質土（やや青灰色かある：炭片を含む）
14. 青灰色粘土
15. 青灰色粘土（14より明）
16. 灰黄褐色粘土（やや泥炭混じり）
17. 暗オリーブ灰色砂礫層（泥炭及び炭木を含む）
18. 明褐色泥炭（0.3～1cm大の川礫を多く含む）
19. 明灰色泥炭質細砂
20. 緑灰色細砂
21. 褐色泥炭

第３図　内海中所在遺跡１　第１、第２、第３、第４トレンチ実測図

壺・壺片、竈片が、ＳＤ－０３から弥生土器底部片、土師器片が、ＳＤ－０４から土師器片、須恵器底部片が、ピットの数基からは土師器壺・甕片や須恵器蓋片等が出土しておりそのうちのＰ－９出土の体部片には内外面に漆とみられる付着物が認められる。また列状に並ぶ５基を含むいくつかのピットには柱根が遺存している。なお遺構の時期は出土遺物等から主に古墳時代後期と考えられるが、ＳＤ－０１・０２と切り合う井戸については断面観察からそれ以降のものと考えられる。

第６トレンチ（Ｔｒ－６）［第４図；図版７］

第４トレンチの南南西約160m、標高4.4mの平野部に設定した４×３mのトレンチである。調査地は水田地として利用されている。厚さ約20cmの耕作上下は灰色(第２・３層)、オリーブ褐色(第４～８層)、暗灰黄色(第９層)、黒褐色(第10層)の粘土層が１m程度続き、その下(標高3.2m弱)は泥炭層となる。このうち第４および第８層(オリーブ褐色粘土層；標高4.1～3.5m付近)が二次堆積とみられる遺物包含層で、山下駄・槽・板材・砥石が出土している。また、標高3.2m付近で立ち木の株が検出されている。なお、遺構は検出されなかった。

第７トレンチ（Ｔｒ－７）［第４図；図版７・８］

第６トレンチの南南西約20m、標高５m程度の平野部に設定した４×４mのトレンチである。調査地は水田地として利用されている。調査時には耕作土は除去されていたが、以下は標高3.9m程度までは自然堆積とみられる比較的整った堆積で、灰色(第１層)、オリーブ黒色(第２層)、灰色(第３層)の砂混じりの粘土層が、またさらにその下に黒褐色(第４・５層)、暗灰黄色(第６層；やや泥炭かかる)の粘土層が堆積する。遺構、遺物ともに検出されなかったが、トレンチ周辺から石庖丁が表採されている。

第８トレンチ（Ｔｒ－８）［第４図；図版８］

第７トレンチの南約85m、標高5.7m弱の平野部に設定した４×４mのトレンチである。調査地は水田地として利用されている。耕作土下は、地表面下１m(標高4.7m)程度までは自然堆積とみられる比較的整った堆積で、黄灰色(第２層)、灰色(第４層)、オリーブ黒色(第５層)、黒褐色(第６～８層；やや泥炭かかる)の粘土層が堆積する。遺物は耕作土直下等から土師器細片が僅かに２点検出されたほかは、標高５m付近の第８層から流木とみられる自然木が認められたのみで、遺構も検出されなかった。

第９トレンチ（Ｔｒ－９）［第６図；図版８］

第８トレンチの南西約20m、標高5.1m強の平野部に設定した４×３mのトレンチである。調査地は水田地として利用されている。耕作土下は、地表面下1.25m(標高3.9m)程度までは自然堆積とみられるが、灰色(第５・７層)、黄灰色(第８層)、オリーブ黒色(第９層)、黒褐色(第10・11層)、オリーブ黒色(第12層)、灰色(第13層)、黒褐色(第14層；やや泥炭かかる)の粘土層が堆積する。遺物は第10層から田下駄が１点検出されたほかは、第10層と11層の境界付近および第11層から流木の可能性が考えられる木が検出されたのみである。また遺構は検出されなかった。

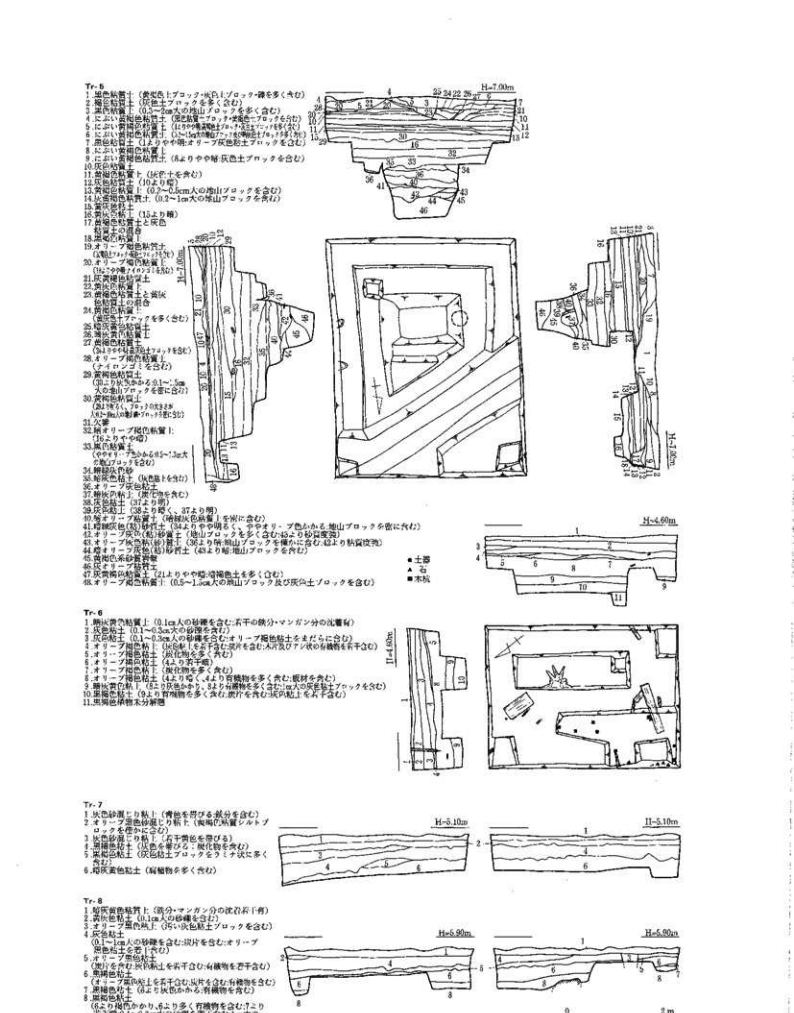
第10トレンチ（Ｔｒ－10）［第６図；図版９］

第９トレンチの西約110m、標高5.4m弱の平野部に設定した５×２mのトレンチである。調査地は水田地として利用されている。耕作土下は、地表面下1.2m(標高4.2m)程度までは整った堆積で、オリーブ灰色(第３層)、褐灰色(第４層)、暗灰色(第５層)、黒褐色(第６層)の粘土層が堆積する。第６層中から立った状態の杭木１が検出されたが、これ以外は遺構・遺物ともに検出されなかった。

第11トレンチ（Ｔｒ－11）［第６図；図版９］

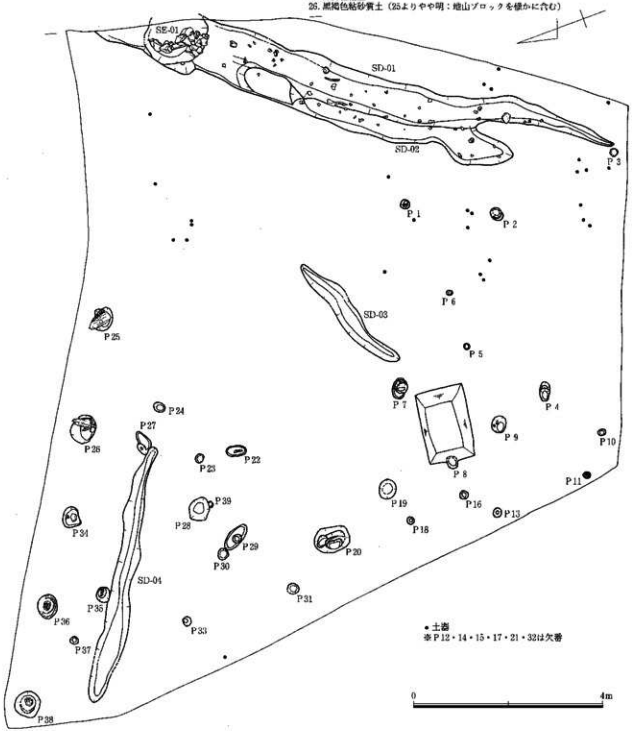
第９トレンチの南南西約145m、標高5.8m弱の平野部に設定した４×４mのトレンチである。調査地は水田地として利用されている。耕作土下は、地表面下1.2m(標高4.6m)程度までは自然堆積とみられる比較的整った堆積で、灰黄褐色粘質土(第４層)より下はいずれも泥炭質の褐灰色(第５層)、暗褐色(第６層)、暗オリーブ褐色(第７・８層)の粘質土層が堆積する。遺構・遺物ともに検出されなかった。

第12トレンチ（Ｔｒ－12）［第６図；図版９・10］



第４図　内海中所在遺跡１　第５、第６、第７、第８トレンチ実測図

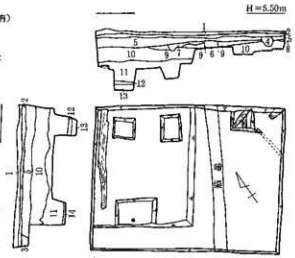
1. 灰褐色粘質土（地山ブロック及び炭化物を含む）
2. 黒褐色粘質土（地山ブロックを多く含む）
3. 黒褐色粘質土（2よりやや黒灰色度強：地山ブロックを含む）
4. 黒褐色粘質土（地山ブロック及び炭化物を含む）
5. 黒褐色粘質土（地山ブロックを密に含む）
6. 黒褐色粘質土（地山ブロックを僅かに含む）
7. 黒褐色粘質土（6よりやや明：地山ブロックを強く含む）
8. オリーブ黒色粘土（地山ブロックを多く含む）
9. オリーブ黒色粘土（地山ブロック及び炭化物を含む）
10. 暗灰黄色粘砂質土（地山ブロックを密に含む：木片を含む）
11. 黄灰色粘質土（地山ブロックを多く含む）
12. 暗灰黄色砂（地山ブロックを含む）
13. 黒褐色粘質土（地山ブロック及び未分解植物遺体・炭化物を含む）
14. 暗褐色泥炭質粘質土（未分解植物遺体を密に含む）
15. 灰色粘砂質土（ややオリーブ黒色かかる：地山ブロック及び未分解植物遺体を含む）
16. 黒褐色泥炭質粘質土（未分解植物遺体を含む）
17. 黒褐色粘質土（やや暗灰色かかる）
18. 淡オリーブ粘質土（地山ブロック及び炭化物を僅かに含む）
19. 暗オリーブ粘質土（木片を含む）
20. 灰色粘質土（ややオリーブ色かかる：地山ブロック及び土器片を含む）
21. 暗オリーブ灰色粘土
22. オリーブ黒色砂混じり粘質土（土器片・木片・炭化物及び地山ブロックを多く含む）
23. オリーブ黒色粘質土（22より暗：木片・炭化物及び土器片を含む）
24. 灰色粘土（ややオリーブ色かかる）
25. 黒褐色粘土
26. 黒褐色粘砂質土（25よりやや明：地山ブロックを僅かに含む）



第５図　内海中所在遺跡１　第５トレンチ拡張部実測図

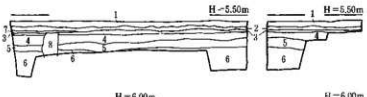
Tr-9

1. 暗黄灰色粘質土（炭片を含む：鉄分・マンガン分の若干の沈着有）
2. 黄灰色粘土（炭片を含む）
3. 黄灰色粘土（2より若干暗：黒褐色粘土ブロックを若干含む）
4. 黄灰色粘土（2より暗：黒褐色粘土ブロックを若干含む）
5. 灰色粘土（オリーブ黒色粘土を含む：0.1～1cm大の砂礫を含む：炭片を含む）
6. 灰色粘土（青い灰色粘土ブロックを含む）
7. 灰色粘土（オリーブ黒色粘土を含む：2cm大の砂礫を含む）
8. 黄灰色粘土（0.3cm大の砂礫を含む）
9. オリーブ黒色粘土（0.1～0.3cm大の砂礫を若干含む）
10. 黒褐色粘土（1cm大の灰色粘土ブロックを若干含む：有機物を含む）
11. 黒褐色粘土（10より明るく灰色かかる：10より多く有機物を含む：炭片を含む：2～5cm大の灰色粘土ブロックを若干含む）
12. オリーブ黒色粘土（炭化物を多く含む：有機物を含む）
13. 灰色粘土（12より明：炭片を含む：有機物を含む：灰色粘土ブロックを多く含む）
14. 黒褐色粘土（11より暗色かかる：炭片を含む：有機物を多く含む）



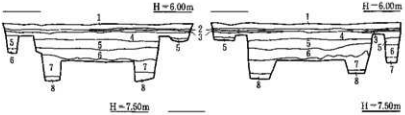
Tr-10

1. にぶい黄褐色粘質シルト（マンガンを多く含む）
2. 灰色粘土（マンガンを含む）
3. オリーブ灰色粘土（マンガンを含む）
4. 暗灰色粘質土（マンガン及び鉄分を含む）
5. （明）灰色粘土（鉄分を濃状に上位から下方へ含む）
6. 黒褐色粘土（瘤かの腐植物及び自然木等を含む）
7. 鉄分沈着層
8. 暗茶地土



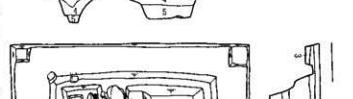
Tr-11

1. 暗灰黄色粘質土
2. 黄灰色粘質土
3. 黄灰色粘質土（2より明：黄褐色無機物沈着）
4. 灰黄褐色粘質土
5. 褐灰色起炭質粘質土
6. 暗褐色起炭質粘質土
7. 暗オリーブ褐色起炭質粘質土
8. 暗オリーブ褐色起炭質粘質土（7より暗）



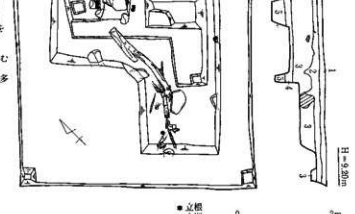
Tr-12

1. 灰色粘質土
2. 褐灰色粘質土（灰色土ブロック及び暗褐色土ブロックを含む：明黄褐色無機物沈着）
3. 褐灰色粘質土（2よりやや暗、暗褐色土ブロックを多く含む）
4. 暗褐色粘質土（褐灰色土ブロックを多く含む：0.2～1cm大の地山小礫を含む）
5. にぶい黄褐色粘質土（明黄褐色、黒機物沈着）
6. 暗緑灰色粘質土
7. 灰黄褐色粘質土（暗褐色土ブロックを含む：黄褐色無機物沈着）
8. 暗緑灰色粘質土（6よりやや暗）
9. 黒褐色粘質土（灰白色粘土ブロック及び0.2～2cm大の地山小礫を含む：土器片を含む）
10. 暗褐色粘質土（褐灰色土ブロック及び0.2～1cm大の地山小礫を含む）
11. 黒褐色粘質土（9よりやや暗：0.2～1cm大の地山小礫を含む）
12. 黒褐色粘質土（9・11よりやや明）



Tr-13

1. 褐灰色粘質土
2. 褐灰色粘質土（1より明：0.2～1cm大の地山小礫を極かに含む：部分的に暗褐色土ブロックを含む）
3. 暗灰黄色礫混じり粘質土（0.5～40cm大の地山礫を密に含む）
4. 黒褐色粘質土（褐灰色土ブロック及び0.5～10cm大の地山礫を多く含む：部分的にオリーブ黄色地山礫を多く含む）
5. 暗褐色粘質土
6. 暗褐色粘質土（5よりやや暗：0.2～10cm大の地山礫を多く含む：粗土？）
7. 明灰黄色礫混じり粘質土（3より明：0.5～50cm大の地山礫を多く含む：撹乱土？）
8. 灰黄褐色粘質土（0.5～30cm大の地山礫を含む：撹乱土？）
9. 黒褐色粘質土（4より暗：0.5～5cm大の地山礫を密に含む）



第６図　内海中所在遺跡１　第９、第10、第11、第12、第13トレンチ実測図

第11トレンチの南南西約150m弱、標高7.2m弱の丘陵裾の谷口部分に設定した4.9×4.8mのトレンチである。調査地は水田地として利用されている。耕作土下は、暗渠が錯綜するほかは地表面下1.2m(標高5.95m)程度までは自然堆積と考えられ、暗緑灰色(第6・8層)、黒褐色(第9・11層)の粘質土層が堆積する。第9層が二次堆積とみられる遺物包含層で、須恵器片・瓦質土器片・著状木製品が検出されたほか、暗渠埋土中から土鍋口縁部片が出土している。遺構は検出されなかった。

第13トレンチ(Tr−13) [第6図;図版10]

第12トレンチの南約110m強、標高8.9m強の丘陵裾の谷口部分に設定した5×5mのトレンチである。調査地は水田地として利用されている。耕作土下は、暗渠(第6層)や撹乱土(第7〜9層)が認められるほかは地表面下1.2m(標高7.7m)程度までは自然堆積と考えられ、褐灰色(第2層)、礫混じりの暗灰黄色(第3層)、黒褐色(第4層)、暗褐色(第5層)の粘質土層が堆積する。第2および第4層が二次堆積とみられる遺物包含層で、前者からは土師器底部細片が、後者からは炭化物の付着した土師器皿、須恵器片が、また暗渠付近から糸切りの土師皿や上鍋、曲物の蓋または底板等が出土している。遺構は検出されなかった。

第14トレンチ(Tr−14) [第7図;図版11]

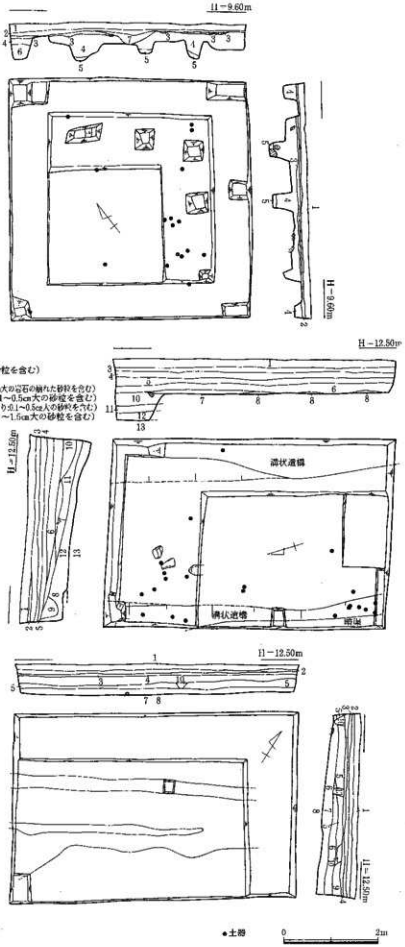
第13トレンチの南西約60m、標高9.3mの丘陵裾の微高地に設定した5×5mのトレンチである。調査地は水田地として利用されている。耕作上下に薄い床土と考えられる暗オリーブ灰色粘質土層(第2層)があり、その下には部分的に撹乱とみられる黄褐色礫混じり粘質土層(第7層)が認められる。これら以外は、礫の入り具合等から土石流的な堆積とも考えられるが地表面下0.8m(標高8.5m)程度までは自然堆積と考えられ、0.5〜30cm大の地山礫を含む黄褐色(第3層)、暗褐色(第4層)、黒褐色(第6層)の粘質土層、灰色粘土層(第5層)が続く。第3、4、5層が二次堆積とみられる遺物包含層で、第3層からは著しく磨滅した土師器片や須恵器の高台部片が、第4、5層からは土師器壺口縁部片・高杯、須恵器蓋・高台部、磁器片が出土している。遺構は検出されなかった。

第15トレンチ(Tr−15) [第7図;図版11・12]

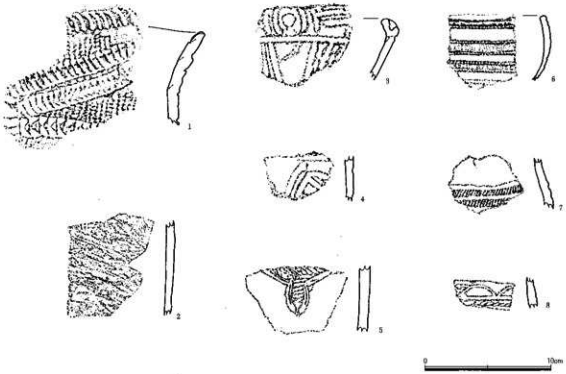
第14トレンチの南西約465m、標高12.3m弱の丘陵裾の微高地に設定した6×3.95mのトレンチである。調査地は水田地として利用されている。耕作上下は、地表面下0.5m(標高11.8m)程度までほぼ水平に黄灰色シルト層(第3〜5層)が続き、その下は地山にそって西から東に傾斜をもって黄灰色(第6層)・灰色粘質(第7層)・褐灰色粘質(第8層)のシルト層、黒褐色(第10層)・褐灰色(第11層)の粘質土層、そして褐灰色粘土層(第12・13層)へと続く。標高11.6m程度の第7・8層上面および斜面で標高11.2〜11.8m程度の第12層上面が遺構面と考えられ、それぞれ溝状遺構を検出した。東側溝の第10層、西側溝の第9層がそれぞれの埋土で、遺物は、第10層から土師器皿等が、第9層から土師器製塩土器片・底部片や須恵器高杯・底部片・高台部片等が検出されたほか、第3〜6層から土師器製塩土器片・口縁部片、須恵器口縁部・高台部、陶磁器片等が検出されている。また第13層上面からは、遺構は検出されていないものの須恵器杯底部や高台部片が多く検出されている。なお遺構の時期は奈良・平安時代前半頃と考えられる。

第16トレンチ(Tr−16) [第7図;図版12]

第15トレンチの南西約70m、標高12.4mの丘陵裾の微高地に設定した6×3.95mのトレンチである。調査地は水田地として利用されている。耕作上下は、地表面下0.25m(標高12.15m)程度までは客土とみられる黄灰色シルト層(第2・3層)が認められる。それ以下は地山に沿った北西から南東の傾斜はあるものの順層で、地表面下0.8m(標高11.6m)程度まで黒褐色(第4層)・褐灰色(第5層)の粘質土層、褐灰色(第6〜8層)の粘土層と続く。このうち第5層上面が遺構面で、炭片等を多く含んだ黒色粘質土(第10層)を埋土にもつ溝状遺構を検出した。遺物は、耕作上〜第3層から磨滅した土師器底部片・須恵器片・陶器片等が、それ以下から糸切りの土師器底部片・須恵器蓋片・瓦質土器片等が検出されてい



第７図　内海中所在遺跡１　第14、第15、第16トレンチ実測図



第８図　内海中所在遺跡１　表採縄文土器実測図（拓影）

る。なお遺構の時期は奈良・平安時代前半頃と考えられる。

その他　[第８図；図版13]

今回の調査対象地の範囲は南北に１km以上にも渡ったが、各トレンチ調査中に周辺の数ヶ所から遺物を採取した。試掘調査の成果の一つとして若干触れておく。

遺物の表採地点は主に３ヶ所で、北から、第５トレンチの北北東約220m前後の丘陵裾付近「Ａ地点」。第５トレンチの北北東約150m前後の谷口から丘陵裾付近「Ｂ地点」。第６・７トレンチの東約30m前後の丘陵裾付近「Ｃ地点」である。それぞれＡ地点からは上師器帝口縁部片、須恵器蓋・高台部片等が採取されている。Ｂ地点からは土師器壺・甕・赤彩高杯・竈・突起支脚、須恵器蓋杯・蓋・高台部・脚部片等が採取されている。これらの遺物からＡおよびＢ地点周辺に古墳時代から古代にかけての遺構が存在する可能性が考えられる。また、Ｃ地点からは、弥生土器底部片、上師器壺、須恵器片のほかに縄文土器が採取されており、周辺に縄文時代から古代にかけての遺構が存在する可能性が考えられる。このうち縄文土器の良好なものについて拓本を試みた。(1)は前期の土器で、羽状縄文の地文に連続爪形文が施される特徴を持つ。岡山県磯ノ森式土器に類似すると思われるが、この時期の土器は市内ではまだ類例が少なく貴重な資料である。(2)は粗製土器体部片。(3～5)は後期の土器で、(3)は巻貝等による凹線や押圧点文が配された口縁部の発達した文様帯に特徴が見られ、(4)も同様のものと考えられる。(5)は沈線の外側を磨り消した磨消縄文土器。(6～8)も後期の土器で、(6)は沈線の中に連続して刺突が施され、(7)は凹線間に縄文が施される。(8)には元住吉山Ⅰ式の特徴とされる連弧文が認められる。

Ⅲ　岩吉遺跡

1．遺跡の位置と環境

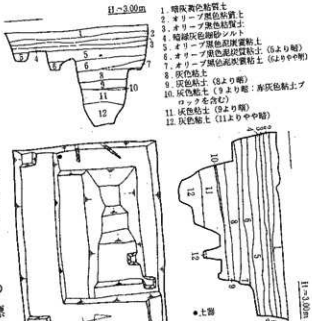
岩吉遺跡は、千代川によって形成された沖積平野である鳥取平野の左岸側平野部のほぼ中央に位置し、南北約1.2km、東西約0.8km前後の範囲に広がる大遺跡である。かつてはのどかな田園の広がる穀倉地帯であったが、遺跡内を東西に横切るＪＲ山陰線や旧国道９号線の開通以降開発が進み現在では商工業地帯として大きく変貌を遂げている。また現在では治水も進んで穏やかな地目となっているが、古くはこの周辺は千代川の支流である野坂川の氾濫に悩まされる地帯であったと考えられている。その中で千代川左岸側平野部の中央部を南北に伸びる微高地上に弥生時代から古墳時代にかけての集落が形成されるとともにその周辺に水田が営まれる。また律令期には条里が引かれ、川の氾濫が次第に治まり始めたと考えられる平安期には何らかの官的な施設が設置されていたようである。今回の調査地はこのような遺跡のほぼ中央部で、岩吉集落の東300m弱の水田地帯に位置する。

2．発掘調査の概要

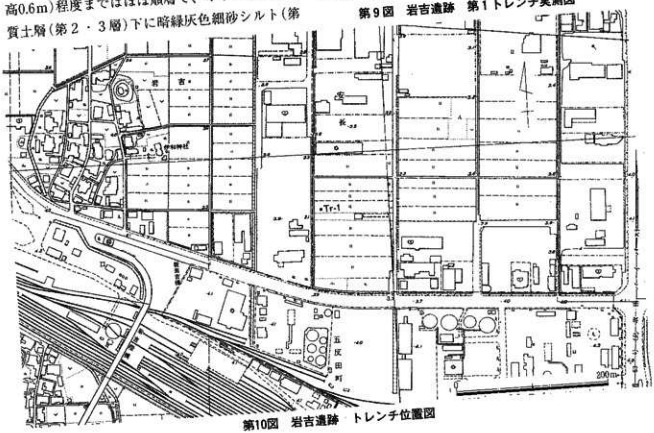
今回の発掘調査は、携帯電話基地局鉄塔施設整備に伴い実施したものである。調査対象地は平野部の水田中に位置したが、狭小であったため１ヶ所のトレンチ（Ｔｒ－１）を設定した。

第１トレンチ（Ｔｒ－１）　［第９図；図版13］

標高2.7m程度の水田部に設定した４×３mのトレンチである。耕作土下は、地表面下2.1m（標高0.6m）程度まではほぼ順層で、オリーブ黒色粘質土層（第２・３層）下に暗緑灰色細砂シルト（第



第９図　岩吉遺跡　第１トレンチ実測図



第10図　岩吉遺跡　トレンチ位置図

4層)、その下にオリーブ黒色泥炭質粘土層(第5～7層)、灰色粘土層(第8～12層)と続く。このうち第5・6層が遺物包含層で、土師器口縁部片・須恵器口縁部片、板材等が僅かに検出された。平成7年度に調査地の西約400m付近で調査が行われ古墳時代から平安時代にかけての遺構が検出されているがその際の遺物の出土状況等とも比較すると二次堆積遺物の可能性も考えられる。遺構は検出されなかった。

Ⅳ　桂見古墳群

1．遺跡の位置と環境

桂見古墳群は、鳥取平野南西縁、ＪＲ鳥取大学前駅の南約２～3.5kmの丘陵上に形成されている。この鳥取平野南西縁ではこの約20年の間に総合運動公園や大規模活性化プロジェクトの一貫の公園整備、大規模宅地開発等が進み、各遺跡で発掘調査が実施されてきている。桂見古墳群でもこれまでに1983(昭和58)年度・1992(平成４)年度に調査が実施されたほか、数次の試掘調査が行われている。このうち1983年の調査では、長辺28m、高さ4.5mの(長)方形墳である２号墳も調査されたが、長さ7.5m、幅4.9mの墓壙から長さ5.5mの長大な木棺が検出され、その中から朱とともに鉄刀・刀子・針状の鉄製品や舶載鏡である破砕された内行花文鏡や斜縁獣帯鏡が出土している。また1992年度の調査では、全長24.5m、後円部径16mの小規模前方後円墳である６号墳等が調査されている。

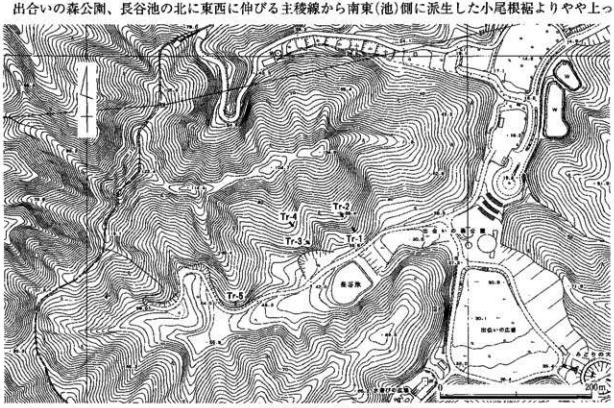
なお本古墳群周辺には、丘陵上ではほかに倉見古墳群・布勢鶴指奥墳墓群・里仁古墳群等が、また平野部では桂見遺跡・東桂見遺跡・布勢遺跡・帆城遺跡などが形成され、市内でも有数の遺跡密集地帯となっている。

2．発掘調査の概要

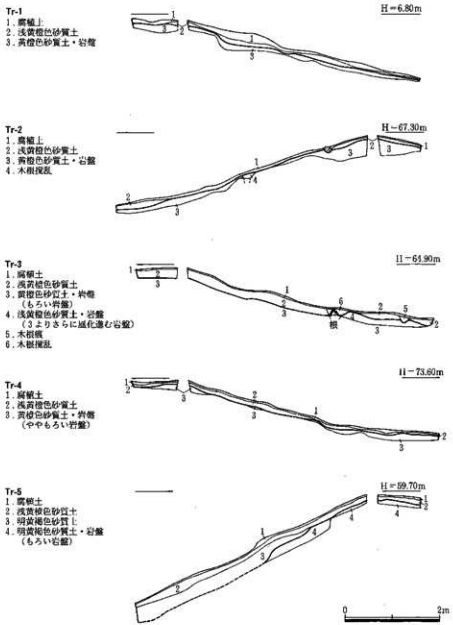
今回の発掘調査は、公共施設整備に伴い昨年度に続いて実施したものである。調査は桂見集落の南西に入り込む谷と入り組んだ丘陵で、昨年度調査した丘陵の一つ南に位置する丘陵上に傾斜の変換点やマウンド状の微地形の裾に計５ヶ所のトレンチ(第１～５トレンチ)を設定した。

第１トレンチ（Ｔｒ－１）［第12図；図版14］

出合いの森公園、長谷池の北に東西に伸びる主稜線から南東(池)側に派生した小尾根裾よりやや上っ



第11図　桂見古墳群　トレンチ配置図



第12図　桂見古墳群　第1、第2、第3、第4、第5トレンチ実測図

た傾斜変換点に設定した4.9×1mのトレンチである。調査地は雑木林で、トレンチ高所の標高は60.7m程度である。腐植土および10cm前後の表土(第2層；浅黄橙色砂質土／いわゆる真砂土)下は直ちに黄橙色砂質土あるいは岩盤の地山となる。地山加工痕跡や遺構、遺物は検出されなかった。

第2トレンチ（Tr－2）［第12図；図版14］

第1トレンチと同一小尾根の上位の傾斜変換点に設定した5.3×0.9mのトレンチである。調査地は雑木林で、トレンチ高所の標高は67.2m程度である。木根による撹乱を認める以外は第1トレンチと同様の堆積で、地山加工痕跡や遺構、遺物は検出されなかった。

第3トレンチ（Tr－3）［第12図；図版14］

第1・2トレンチの位置する小尾根の一つ南西隣に同様に主稜線から派生した小尾根裾よりやや上った傾斜変換点に設定した5.2×0.9mのトレンチである。調査地は雑木林で、トレンチ高所の標高は64.8m強である。表土の浅黄橙色砂質土(第2層)の厚さがやや厚い程度で、あとは第1・2トレンチと同様の堆積状況で、地山加工痕跡や遺構、遺物は検出されなかった。

第4トレンチ（Tr－4）［第12図；図版15］

第３トレンチと同一小尾根の上位の傾斜変換点に設定した5.3×１ｍのトレンチである。調査地は雑木林で、トレンチ高所の標高は73.5m程度である。１～３トレンチと同様に腐植土および10cm前後の表土(第２層；浅黄橙色砂質土)下は直ちに黄橙色砂質土あるいは岩盤の地山となる。地山加工痕跡や遺構、遺物は検出されなかった。

第５トレンチ（Ｔｒ－５）［第12図；図版15］

第３・４トレンチの位置する小尾根の一つ南西隣に同様に主稜線から派生した小尾根裾付近の傾斜変換点に設定した4.9×0.9ｍのトレンチである。調査地は雑木林で、トレンチ高所の標高は59.6m強である。表土下に傾斜に沿って途中から自然堆積と見られる第３層(明黄褐色砂質土)が堆積し、その下が地山となる部分と第２層直下が地山となる部分が認められる。しかしながら地山加工痕跡は認められず、遺構・遺物も検出されなかった。

Ⅴ　おわりに

最後に、今回の調査結果について各遺跡ごとに簡単に触れることでまとめに代えたい。

１）内海中所在遺跡１

調査の結果明瞭な遺構を確認したのは第５、15、16トレンチである。このうち調査地の北東端部丘陵裾微高地上に設定した第５トレンチでは拡張調査の結果、井戸状遺構・溝・ピットが地表面下1.7m程度から検出された。出土遺物から古墳時代後期およびそれ以降のものと考えられるが遺構埋土中には弥生土器片も見受けられ、付近に設定した第３、４トレンチからも遺構は確認されなかったものの、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、扇の骨や漆器等の木製品等が出土しており、この丘陵裾で小谷口付近の微高地周辺にほかにも各時期の遺構の存在が予測される。また調査地の南西端部に設定した第15、16トレンチでは、それぞれ溝状遺構が検出されたほか、第15トレンチでは遺構は確認されなかったもののこの遺構面以外に遺物が多く検出された土層面があり、部分的に二面の遺構面が存在する可能性がうかがえる。出土遺物から時期は奈良・平安時代前半頃と考えられる。

なおその他のトレンチのうち、遺構・遺物ともに検出されなかった第10・11トレンチを除くと、平野部に設定したトレンチからは土器類とともに出下駄等の木製品が出土しており、各トレンチでは遺構は確認されなかったもののこの大きな谷部のいずれかに水田遺構等の存在する可能性を示唆しているものと考えられる。

以上のように、今回の調査対象地は奥行き２km以上にも上る谷の広い範囲ではあったが、この谷に面した丘陵裾部で小谷口付近の微高地周辺から遺構あるいは遺物が比較的集中して検出された。またその前面の平野部(水田部)からは水田遺構に関連した遺物が検出されており、今後はこれらの点を考慮していく必要があると思われる。

２）岩吉遺跡

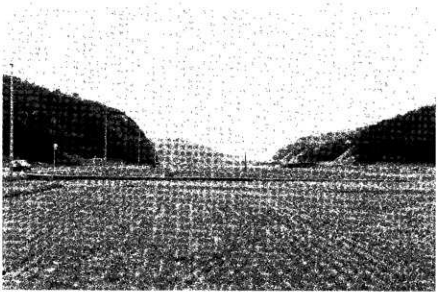
調査の結果遺構は検出されず、包含層遺物として土師器、須恵器、板材等が僅かに出土した。平成７年度に西南西約400ｍで行われた調査では古墳時代から奈良・平安時代の掘立柱建物・土坑・井戸・溝状遺構・溜り状落ちこみ遺構・杭列等が検出されている。今回の調査で出土した遺物は僅かではあるが、この平成７年度の調査地と類似する可能性も考えられる。しかしながら限られた範囲での調査であり、具体的な遺跡の把握には至らなかった。

３）桂見古墳群

調査は古墳等の存在確認に主眼をおいて５ヶ所のトレンチを設定して実施した。調査の結果、当該の遺構・遺物ともに確認できず、調査トレンチ周辺には古墳等の遺跡は存在しないものと考えられる。

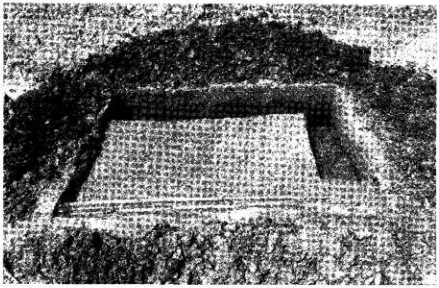
写 真 図 版

図版１

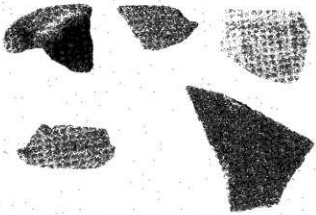


１．内海中所在遺跡１
調査地遠景（１）
（西北西から）

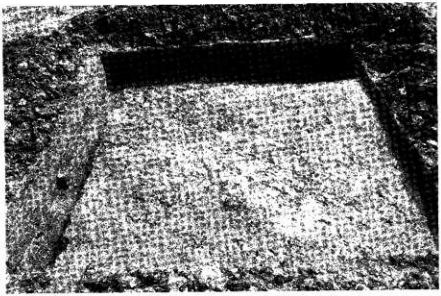
２．内海中所在遺跡１
調査地遠景（２）
（南南西から）



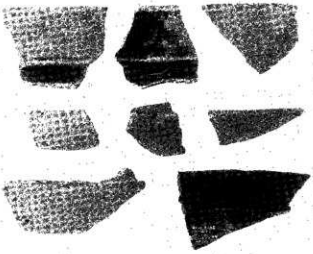
３．内海中所在遺跡１
第１トレンチ（東南東から）



1．内海中所在遺跡 1
第 1 トレンチ出土遺物

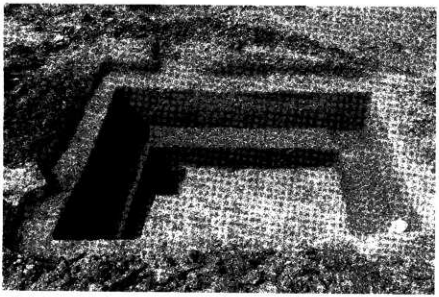


2．内海中所在遺跡 1
第 2 トレンチ(北北東から)

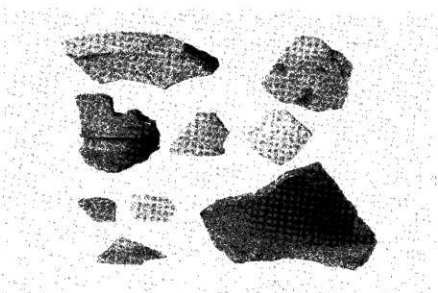


3．内海中所在遺跡 1
第 2 トレンチ出土遺物

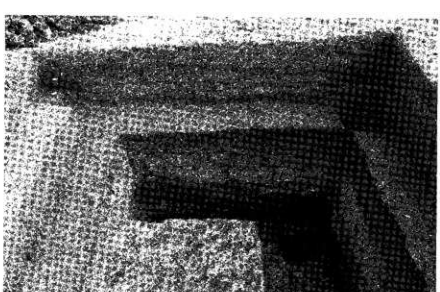
図版 3



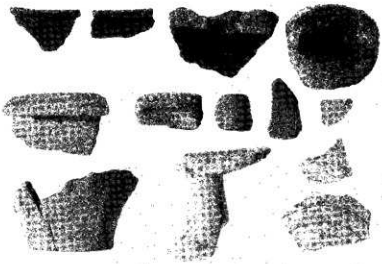
1．内海中所在遺跡 1
第 3 トレンチ　（東から）



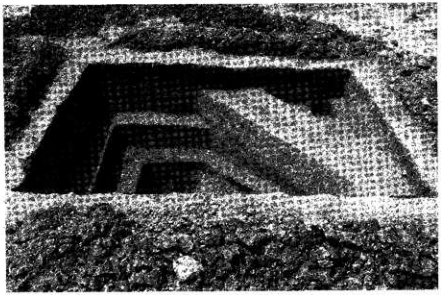
2．内海中所在遺跡 1
第 3 トレンチ出土遺物



3．内海中所在遺跡 1
第 4 トレンチ南壁断面
（北から）



1．内海中所在遺跡 1
第 4 トレンチ出土遺物

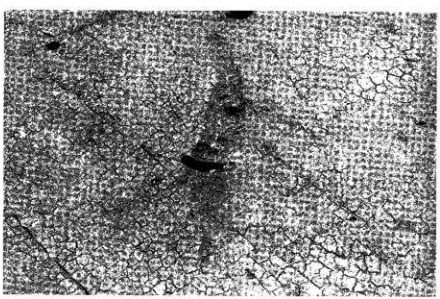


2．内海中所在遺跡 1
第 5 トレンチ（東から）

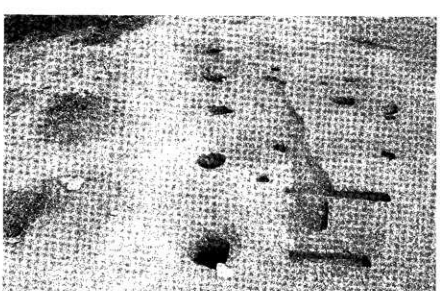
3．内海中所在遺跡 1
第 5 トレンチ拡張部
（東南東から）

図版 5

1．内海中所在遺跡 1
第 5 トレンチ拡張部
SD-01,02　　（南西から）

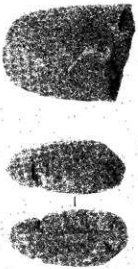


2．内海中所在遺跡 1
第 5 トレンチ拡張部
SD-03　　（東北東から）

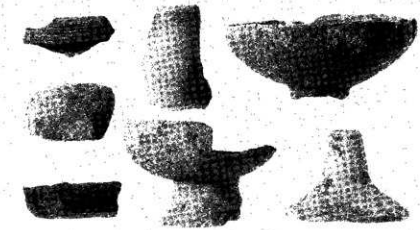


3．内海中所在遺跡 1
第 5 トレンチ拡張部
ピット列およびSD-04
（東北東から）

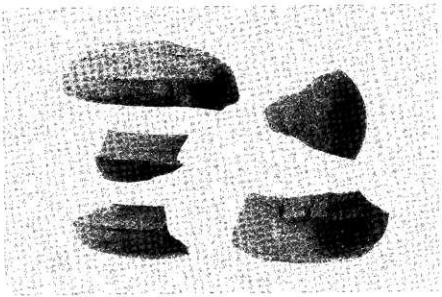
1.内海中所在遺跡1　第5トレンチ出土遺物



2.内海中所在遺跡1　第5トレンチ拡張部出土遺物

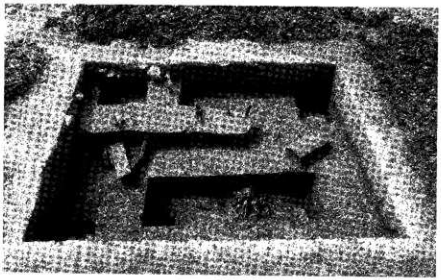


3．内海中所在遺跡1
第5トレンチ拡張部
SD-01,02出土遺物（1）

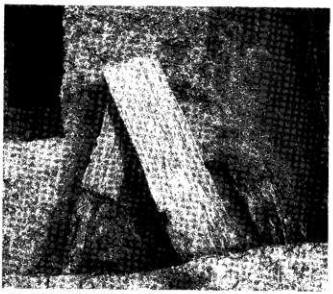


4．内海中所在遺跡1
第5トレンチ拡張部
SD-01,02出土遺物（2）

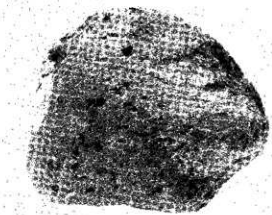
図版 7



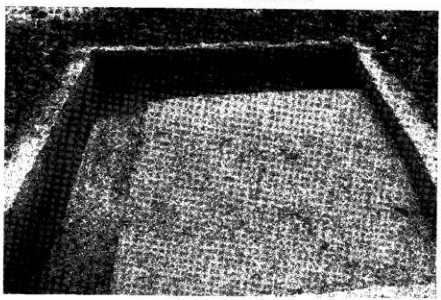
1．内海中所在遺跡 1
第 6 トレンチ
（東南東から）



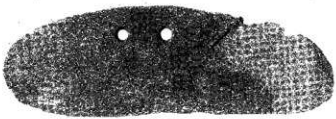
2．内海中所在遺跡 1　第6トレンチ遺物出土状況
（西北西から）



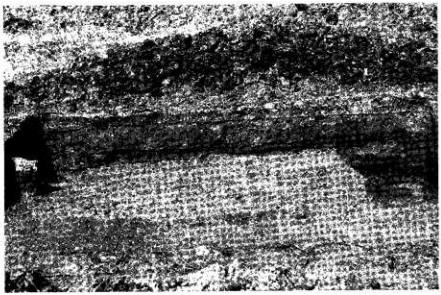
3．内海中所在遺跡 1　第6トレンチ出土遺物



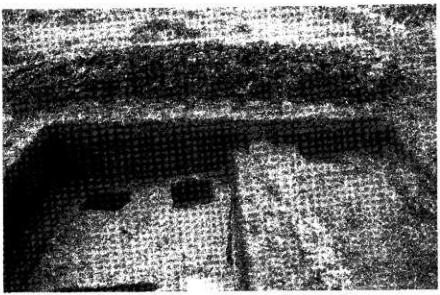
4．内海中所在遺跡 1
第 7 トレンチ（東南東から）



1．内海中所在遺跡 1
第 7 トレンチ周辺表採遺物

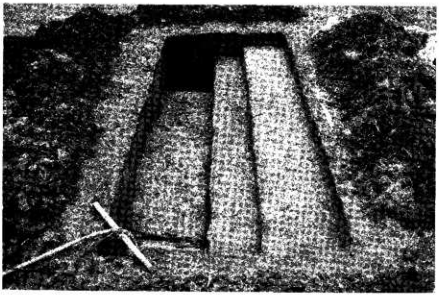


2．内海中所在遺跡 1
第8トレンチ西壁断面
（東南東から）

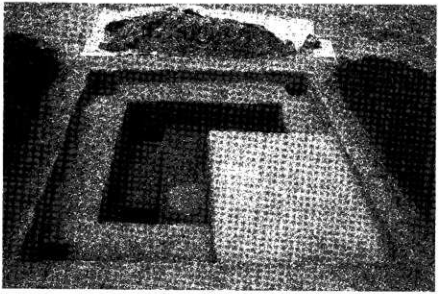


3．内海中所在遺跡 1
第 9 トレンチ北壁断面
（南南西から）

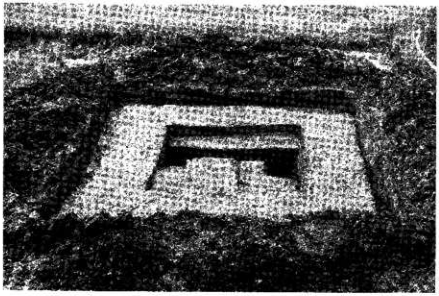
図版 9



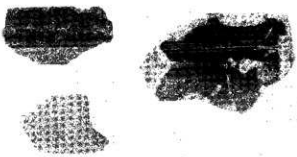
1．内海中所在遺跡 1
第10トレンチ（東南東から）



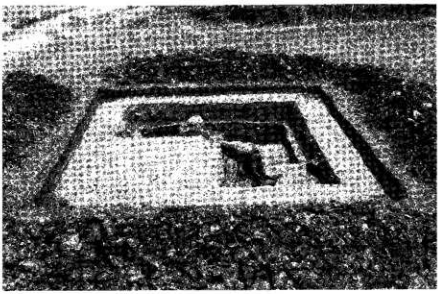
2．内海中所在遺跡 1
第11トレンチ（南南西から）



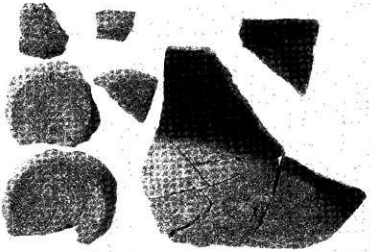
3．内海中所在遺跡 1
第12トレンチ（東南東から）



1．内海中所在遺跡１
第12トレンチ出土遺物

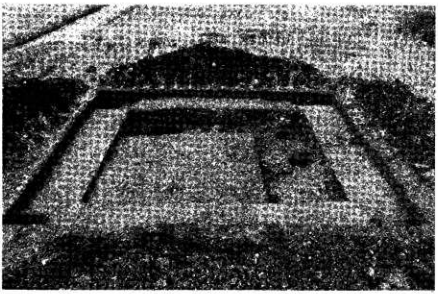


2．内海中所在遺跡１
第13トレンチ　（南西から）

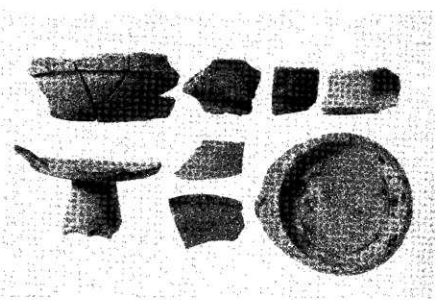


3．内海中所在遺跡１
第13トレンチ出土遺物

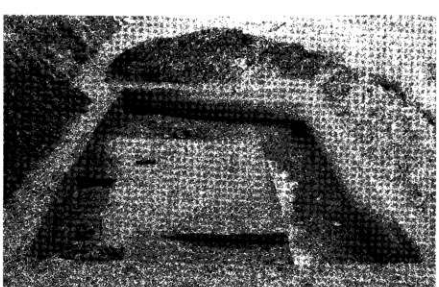
図版11



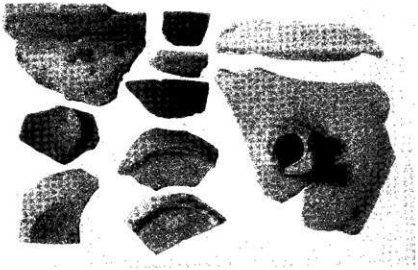
1．内海中所在遺跡1
第14トレンチ　（南西から）



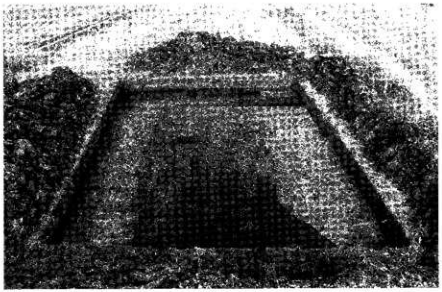
2．内海中所在遺跡1
第14トレンチ出土遺物



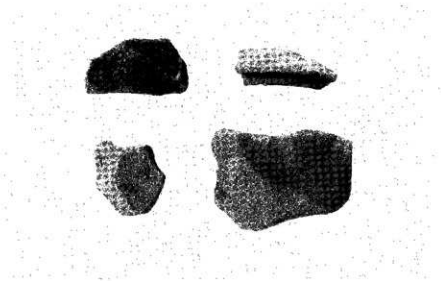
3．内海中所在遺跡1
第15トレンチ　（南から）



1．内海中所在遺跡１
第15トレンチ出土遺物

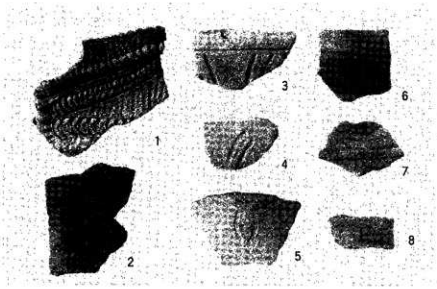


2．内海中所在遺跡１
第16トレンチ　（南西から）



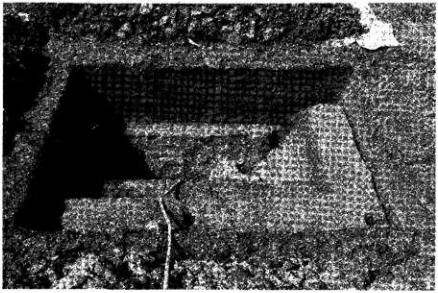
3．内海中所在遺跡１
第16トレンチ出土遺物

図版13



1．内海中所在遺跡１
表採縄文土器

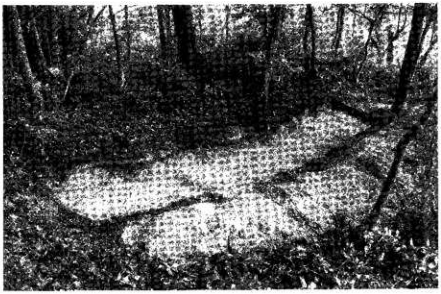
2．岩吉遺跡
調査地近景　　（西から）



3．岩吉遺跡
第１トレンチ　（南から）

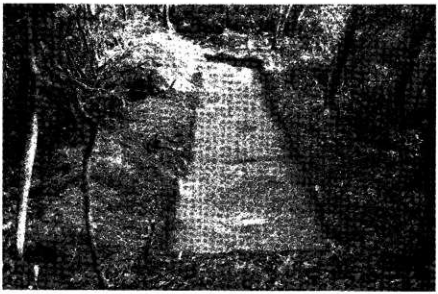
1．桂見古墳群
第1トレンチ　（北西から）

2．桂見古墳群
第2トレンチ　（北西から）



3．桂見古墳群
第3トレンチ縦断面
（西から）

図版15



1．桂見古墳群
第４トレンチ　（北西から）

2．桂見古墳群
第５トレンチ縦断面
（東から）

平成１４(2002)年度　市内遺跡　発掘調査トレンチ一覧表

調査遺跡名	トレンチ	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
内海中所在遺跡１	Ｔｒ－１	12 (4×3)	－	弥生土器、土師器、須恵器	
〃	Ｔｒ－２	16 (4×4)	－	土師器、須恵器、土鍋、田ド駄、流木	
〃	Ｔｒ－３	12 (4×3)	－	弥生土器、土師器、須恵器、漆器、木製品	
〃	Ｔｒ－４	16 (4×4)	－	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土錘	
〃	Ｔｒ－５	20 (5×4)	井戸状遺構 溝状遺構 ピット	弥生土器、土師器、須恵器、土鍋、土錘、鉄製品、石製品、柱材、木製品	遺構・遺物は拡張部出土のものを含む
〃	Ｔｒ－６	12 (4×3)	－	土師器、軽石、木製品	
〃	Ｔｒ－７	16 (4×4)	－	－	トレンチ周辺から石庖丁を表採
〃	Ｔｒ－８	16 (4×4)	－	土師器	
〃	Ｔｒ－９	12 (4×3)	－	木製品	
〃	Ｔｒ－10	10 (5×2)	－	－	
〃	Ｔｒ－11	16 (4×4)	－	－	
〃	Ｔｒ－12	23.52 (4.9×4.8)	－	須恵器、瓦質土器、木製品	
〃	Ｔｒ－13	25 (5×5)	－	土師器、須恵器、木製品、流木	
〃	Ｔｒ－14	25 (5×5)	－	土師器、須恵器、磁器	
〃	Ｔｒ－15	23.7 (6×3.95)	溝状遺構	土師器、須恵器、陶磁器	
〃	Ｔｒ－16	23.7 (6×3.95)	溝状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、陶器	
岩吉遺跡	Ｔｒ－１	12 (4×3)	－	土師器、須恵器、木製品	
柱見古墳群	Ｔｒ－１	4.9 (4.9×1)	－	－	
〃	Ｔｒ－２	4.77 (5.3×0.9)	－	－	
〃	Ｔｒ－３	4.68 (5.2×0.9)	－	－	
〃	Ｔｒ－４	5.3 (5.3×1)	－	－	
〃	Ｔｒ－５	4.41 (4.9×0.9)	－	－	

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいせい14（2002）ねんど とっとりしない いせき はっくつちょうさがいようほうこくしょ
書 名	平成１４（２００２）年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書
副 書 名	内海中所在遺跡１・岩吉遺跡・桂見古墳群
巻 次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	山田真宏 平川 馨
編 集 機 関	鳥取市教育委員会
所 在 地	〒680-0047 鳥取県鳥取市上魚町39 TEL. (0857) 22-8111(代)
発行年月日	西暦2003年 3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
うちみなか 内海中 しょざいいせき 所在遺跡１	とっとりし 鳥取市 うちみなか 内海中	31201		35° 30′ 19″ ～ 35° 30′ 53″	134° 06′ 34″ ～ 134° 06′ 57″	20020408 ～ 20021115	278.92	ほ場整備
いわよしいせき 岩吉遺跡	とっとりしいわよし 鳥取市岩吉	31201		35° 30′ 29″	134° 12′ 01″	20020422 ～ 20020424	12.0	携帯電話基地局 鉄塔施設整備
かつらみこふんぐん 桂見古墳群	とっとりしかつらみ 鳥取市桂見	31201		35° 29′ 15″ ～ 35° 29′ 19″	134° 10′ 11″ ～ 134° 10′ 19″	20021002 ～ 20021003	24.06	公共施設整備

所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
内海中 所在遺跡１	散布地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安	井戸状遺構、溝、ピット	縄文土器、弥生土器、上師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、木製品、石製品、土製品	試掘調査として実施
岩吉遺跡	集落	古墳？～奈良・平安	－	須恵器、木製品	試掘調査として実施
桂見古墳群	古墳？	－	-	－	試掘調査として実施

平成14(2002)年度
鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

平成15年3月　印刷・発行

編集・発行　鳥取市教育委員会
印　刷　所　株式会社　矢谷印刷所